



ショートコメント

★★★★

Data 2024-14

監督：クレイグ・ギレスピー
 原作：ベン・メズリック
 出演：ポール・ダノ／ピー
 ト・デヴィッドソン／
 ヴィンセント・ドノフ
 リオ／アメリカ・フェ
 レーラ／ニック・オフ
 アーマン／アンソニ
 ー・ラモス

ダム・マネー ウォール街を狙え！

2023年／アメリカ映画
 配給：キノフィルムズ／105分

2024（令和6）年2月3日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

みどころ

2021年初頭にアメリカで起きた「ゲームソフト事件」は知らなくとも、2004年に、新世代の“異端児”堀江貴文が引き起こした「ライブドア事件」は知っているはず。もし知らないなら、その勉強や、“ヘッジファンド”、“空売り”という言葉勉強した上で本作を鑑賞したい。

「山高ければ谷深し」。株の世界ではそれが唯一無二(?)の格言だが、「ウォール街の強欲エリートをぶつつぶせ！SNSで集結した個人投資家たちの大逆襲！」とは一体ナニ？

論点が1つだけの単純な映画だが、NISA（小額投資非課税制度）の拡充によって「貯蓄から投資へ」という政策転換を目指そうとしている昨今の日本では、本作は格好の教材になるかも・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆日本では今から約20年前の2004年に、堀江貴文という新世代の“異端児”(?)が引き起こした「ライブドア事件」が起きたが、アメリカでは、2021年初頭に「ゲームソフト事件」が発生したらしい。これは、「ウォール街の強欲エリートをぶつつぶせ！」を目指した「SNSで集結した個人投資家たちの大逆襲！」だが、チラシによると、その実態は、「ネット掲示板に集った小口の個人投資家たちが、時代遅れで倒産間近と囁かれていたゲームストップ社（実店舗によるゲームソフトの小売企業）の株をこぞって買いまくり、同社を空売りしていたヘッジファンドに大損害を与えた」もので、「アメリカ各地に点在する無力な一般市民がSNSを通じて団結し、強欲なウォール街の大富豪にギャフンと言わせたこの反乱劇は、全米を揺るがす社会現象となり、日本でも大きな反響を呼んだ」そうだ。しかし、あなたはそれを知ってる？

◆日本では長い間「貯蓄から投資へ！」が叫ばれてきた。そして、若年層の投資を促すために「NISA（小額投資非課税制度）」の拡大等の施策が取られてきたが、ハッキリ言って

その流れはまだまだ。私は、ほぼ20~30年間、株式投資を続けている。その最初のきっかけは株主優待を狙ったものだったが、ここ数年は証券会社から「仕組債」の提案がされる等、私自身がいわゆる“ヘッジファンド”の対象になっている。

あなたがもし、ヘッジファンドの意味がわからず、また「空売り」の言葉もわからないのなら、本作の鑑賞前にそれらの初歩的な知識の習得が不可欠だ。

◆本作の主人公は、昼間は保険会社の金融アナリストとして働いている平凡な男キース・ギル（ポール・ダノ）。彼は妻のキャロライン・ギル（シャイリーン・ウッドリー）と、生まれたばかりの一人娘と平凡に暮らしていたが、実は彼には“もう一つの顔”があった。それはつまり、ネット掲示板Reddit（レディット）のフォーラム“WallStreetBets (WSB)”で、赤いイチマキに猫のTシャツをまとった“ローリング・キティ”を名乗り、フォロー一向けに株式投資の動画を発信していたのだ。

今、彼が連日発信し続けているのは、全財産の5万3千ドルをゲームストップ株につき込んだ上、更なる買い増しを謳っていることだ。アメリカ各地の実店舗でゲームソフトを売っているゲームストップ社は、オンラインのダウンロード販売にシェアを奪われて業績はどん底。そのため、大半の投資家からは時代遅れのボロ株と見なされてきたが、キースはさまざまな指標分析に基づき、同社が著しく過小評価されていると動画で語り続けているわけだが、さて・・・。

◆前述のとおり、私が株を最初に購入したのは、株主優待に興味を持ったため。そこには桐谷広人氏という格好のお師匠さんがいたが、一定の財産（資産）を株式投資に振り向けたことは、私にとって極めて有益だった。

他方、私が中学時代に覚えた言葉に“相場師”なる言葉があった。中学生にもかかわらず、そんな言葉を覚えたのは、獅子文六の小説『大番』を読み、その主人公「ギューちゃん」こと赤羽丑之助の生きザマに興味を持ったためだ。もっとも、相場師は乱高下する株に手を出したり、自ら株価を乱高下させるほどの資金をつぎ込んだりするプロの人たちだから、もちろん私には全く無縁の存在だった。ところが、一介のサラリーマンに過ぎないキースは、たった5万3千ドルの投資額ながら、ローリング・キティと名乗るプロの“相場師”のようなものだから、ビックリ！

◆これは優良株？それとも時代遅れのボロ株？その判断は難しいが、少なくとも、その会社の決算書をはじめ、公開されている経営状況、資産状況等をチェックすれば、その会社の良し悪しはわかる。しかし、人間の成長と同じで、会社の成長も、早いものと遅いものがある。そして、誰がどう考えても、人や会社が大きく成長するには、少なくとも5年~10年かかるのは当然だ。

したがって、経営の安定した優良株を購入すれば、毎年の利益配当がつき、場合によれば株主優待がつき、しかも毎年少しずつ株価が上昇していくのだから、そんな株を長期保有すればウハウハだ。この流れは戦争でも起きない限り、また、突然の経済不況でも起きない限り続くから、それが株式投資の王道だ。そんな目で見ると、キースのゲームストップ株への“固執ぶり”は如何なもの・・・？

◆本作のパンフレットにある Column 稲垣貴俊氏（ライター／編集者）の「CM 界の鬼才から映像職人、そして—— 監督クレイグ・ギレスピーと『ダム・マネー』」によると、「映画監督、クレイグ・ギレスピーの作風を説明することは難しい。彼は実話映画の名手であり、尖ったユーモアセンスを持つコメディ監督であり、観客の心をつかむ映像演出にも長けた、オールジャンルのエンターテイナーだからだ——この説明でさえ、ある意味では正しく、しかしある意味では間違っている。」と書かれている。パンフレットには、そんなクレイグ・ギレスピー監督自身の観客に向けた「監督のメッセージ」があるので、これは必読！これを読めば、彼がどんな熱い思いで本作を監督したのかがよくわかる。

たしかに「ゲームストップ」株騒動を見聞する中で、「これは是非、映画に！」と考えるクレイグ・ギレスピー監督とハリウッドの世界観はすごい。日本ではありえないことだ。もっとも、それにもかかわらず、残念ながら本作の論点は 1 つだけだから、それが見えてくると私には少しずつ退屈になってくることに・・・。

◆本作の唯一の論点とは、急騰し始めたゲームストップ株をキースがいつまで持ち続けるか？ということ。逆に言えば空売りを仕掛けてきた、①大手ヘッジファンドのメルビン・キャピタル社の創業者であるゲイブ・プロトキン（セス・ローゲン）がどこまでそれを続けるのか、そして、②投資アプリを運営するロビンフッド社の共同創業者であるブラッド・テネフ（セバスチャン・スタン）や③ロビンフッド社やメルビンに資金提供を続ける会社シデタル・インベストメントの CEO のケン・グリフィン（ニック・オファーマン）らが、いつまで支援し続けるかということだ。

「山上げれば谷深し」。それが唯一無二の（？）株（相場）の格言だから、キースの立場に立てば、ストップ高を続ける中で、ゲームストップ株をいつ、いくらで売却して利益を確定するかが現実的な問題になるはずだ。ところがキースは周辺からいくら売却を進められても、買い姿勢を続けていくから、アレレ、アレレ・・・。この我慢比べは一体いつまで続くの？そして、その結末は如何に？それは、あなた自身の目でしっかりと。

2024（令和6）年2月7日記